11月号

# 光市医師会報

No 181

## I love 光

ニジガハマギク

昭和７年、植物学者、牧野富太郎博士がこの地を訪れ、野生菊の新種を発見し、当時の虹ケ浜駅（現光駅）に由来し、命名したものである。11月中旬から下旬にかけて一斉に開花し、可愛いい花が一面黄金色のじゅうたんを、織りなしている。

昭和62年11月発行
光市医師会

# 医師会月間行事

## 昭和62年10月度理事会

10月13日　PM7：30～
於　光市医師会館

### 議題（報告・協議事項）

1：田尻先生の文部大臣表彰に関して
（竹中会長）
2：周南三市役員会の議題
（福本副会長）
3：光三師会の行事について
（福本副会長）
4：県医創立百周年記念祭の出席について
（福本副会長）
5：光市医師会収支決算報告　4月～9月
（近藤理事）
6：その他

## 昭和62年10月度月例会・研修会

10月27日　PM7：00～
於　光市医師会館

### 研修会

麻薬及び麻薬免許申請と年間使用届受付

### 月例会（報告・協議事項）

研修会終了後

1：田尻先生の文部大臣表彰に関して
（竹中会長）
2：県医創立百周年記念式典参加調査
（竹中会長）
3：光三師会の行事について
（福本副会長）
4：その他

# バイオリン

武田薬品工業光工場診療所
米　今　義　夫

細面の長身で、和服を好んでよく着ていた母は、四十六才にして他界しました。闇夜の凍てつく空気が頬を突きさす、昭和三十九年二月十日の未明のことでした。

それまでの数年間を国立呉病院の内科と外科の病棟に入院の日々を送っていた母にとって、最もささやかな贈り物であり、そして最大の楽しみは、まだ幼くあどけない少年であった一人息子の私のバスに乗っての時折りの見舞いであったろうと思います。

学校が終って家に帰り、ランドセルを放り投げてはすぐさまバスに乗り、母に会いに国立呉病院に行くのです。あまり急いだためにお金を持たずにバスに飛び乗り、降りる時にお金がないのに気付いて、当時はまだ居た車掌さんにバス賃をまけてもらったこともありました。その時の恥ずかしさと、バツの悪さといったらありませんでした。なにしろその少年にしてみれば、自分は悪いことをしたという気持ちはさらさらなく、ただ忘れただけなのにどうして謝らねばならないのかと、いたく自尊心を傷つけられたものですから。

母に会っても、これといって話すことはありません。交わす言葉がなくても母のそばに居たり、学校からまっすぐランドセルを背負ったまま来た時には、病床のすぐ脇の床頭台の上で食器をおしのけながら宿題の算数を解いたり、母と同じ屋根の下に居れれば、それだけで少年は幸せだったのです。平地からやや山手にある病院の、その更に屋上に上がって見慣れぬ街の景色を眺めたり、一人でエレベーターに乗っては閉じ込められたり、病める人に面会に来たのか世話を掛けに来たのかわかったものではありませんでした。

その当時のエレベーターは内側の扉が網のようになっていて、乗り降りする時には手で開けるようになっていたのです。その扉を開けるタイミングを間違えると、階の途中でエレベーターは止まって電灯は突然消え、私は真っ暗になったその中に閉じ込められては泣いていたものでした。心臓が止まる思いでした。初めは間違ってそうなったのでしたが、やがて、いたずらにわざと途中で止めたりして遊んでいました。

その数年間というのは、私が小学校中学年から中学校にかけての頃で、当時の私は学習塾には通わず、週に一度日曜日のバイオリン教室に通う身でしたが、病院での長い闘病生活にある身の母にとってみれば、三人の我が子のこと、とりわけひとり息子のことが頭から離れず、自分がこんな不甲斐ない身の上だから、もしもこの子がグレ

て駄目になってしまったら、『あの子は、お母さんがいないからねえ』と人様から言われるのが辛くて、そうならないようにと私にバイオリンを買い与えて教室に通わせていたものらしく、バイオリンを弾いていれば外に出て遊び歩くこともなかろうし、一人でいても淋しい思いをしなくてすむだろうとの親心からのようでした。病床の身にある親としての自分のいたらなさを我が子に詫びるように、胸の裂けるようなその思い出を、胴のくびれた小さな四弦の楽器に託していたのでしょう。それが家庭を離れて病臥中の母に出来る、母親として我が子にしてやれるすべてでした。『ホフマンの舟唄』や『ユーモレスク』が、レパートリーというには大袈裟すぎる私がマスターしたささやかな練習曲の中では好きな曲で、十八番でした。しかも、妙なる調べには遥か遠く……。

幼少の頃から万事につけて器用だった私でしたから、音楽は歌うのも楽器を弾くのも得意なほうで、ちょうどその頃、創設されたばかりの少年合唱団の第一期生として選ばれてメンバーになって、『おお、牧場はみどり』やうららかで美しい春の隅田川の流れを讃えた歌などを、真っ白なカッターシャツの胸元には何色でしたか今は忘れてしまいましたが蝶ネクタイをつけ、紺色の半ズボンをはいた両足をこころもち開き、両腕を後ろ手に組んで、心はあたかもウイーン少年合唱団になったつもりで歌っていたほどの私でしたが、バイオリンの練習は好きで、もっとうまくなりたいという気持ちとは裏腹に、実力がどうも今ひとつあがりません。

ただ漠然とではあっても、医者になりたい、そして母のような人々の力になりたいと心の中で密かに思っていた少年にとって、楽器の練習など楽しくはあっても、心の底ではどうでもよかったのでしょう。立派な人になってみんなから尊敬され、社会で活躍したいという気持ちの強かったその少年にとってのお手本は、やはり白衣を身にまとった医師であり、教育テレビで時折り見るような楽器演奏者ではなかったようです。楽器の演奏で身を立て、日本一のバイオリニストになってＮＨＫテレビに出演したり、ウイーンフィルハーモニーと協奏曲を共演しようといった目標があるのなら、そのままそれに、とても医者の比ではない血の滲むような努力を傾注しなければならないのでしょうが、いかに私が、幼い時から世界に目を向けたインターナショナルな考えの利発な少年であったにせよ、小心な少年の心には、そんな大それた気持ちがあろうはずがありませんでした。それでも、小さくてくねくねして可愛く、木目の美しい弦楽器のたおやかな音色は、少年の情操を知らず知らずのうちに育んでいったようです。

当時の私たち一家が住んでいた田舎町は、よろずにつけて都会のような競争が余りなく、無風選挙区のようなものでしたから、バイオリンを奏でてばかりの毎日でも、お勉強ばかりして過ごしている毎日でも勿論ありませんでした。それでも私は、片道一時間ほどバスに乗って本通小学校まで合唱団には通わねばならず、更にその上、バイオリンのおけいこに教室通いを病床の母から言いつけられていたのですから、その言いつけは守らねばならず、しかも、学校の

お勉強や毎日の宿題をおろそかにしてよい訳は何ひとつありませんから、きまじめな少年にとってはたいへんな毎日でした。

その冷たさが心地よい春の風が吹き、新年度になりました。私は中学生になり、英語の授業が始まりました。初めて英語の本を手にした私の心は、いやがおうでも高鳴りました。なにしろNHKテレビのニュースや「海外特派員報告」で見て知っていた外国の、とりわけアメリカ合衆国の文物が自分のものとなって、目の前に展けて存在するのですから。何が書いてあるか分かりもしないのに。それでも、とても中学校で使う教科書とは思えない、まるで絵本か漫画本のような多色刷りの中学校1年の教科書クラウンを眺めていくうちに、気障な少年の心はもうアメリカへ、そして私は、まるでチェックの赤いシャツを着て曲がったハンドルの自転車に乗った主人公アメリカの少年トムになって、グリーンフィールドに暮らしているのでした。それから、まるでアメリカ人のように「オオ、サンキュウベリーマッチ、コメイマサン」と、何やら訳の分からない片言の英語らしき言葉でひとりごとを発しては、背筋を伸ばして両腕を大きく左右に広げて、首をすくめてみせるのでした。心はもう、すっかりアメリカ人になっているのでした。

当時の私は、ずいぶん呑気でしたし、呑気に毎日を過ごし宿題をそこそこにやっていても、それでけっこう優秀な少年でいられたものでした。が、ただ漠然とではあっても医師になりたいと思っていましたから、いかに呑気な私でも、少しは勉強に力を入れねばならない気配をうすうすながら感じ始めていたのでした。お医者さんになるには人一倍の勉強は勿論のこと、何でもこなす力と、その上、人から尊敬され信頼される人格が必要だと、我が子を暗示にかけて誘導しようとするずるい母が私に話して聞かせていた上に、まわりの同級生達が私よりも先回りして勉強して、私の知らないことを何でも知っているのですから、そうとは知らない呑気な少年の心は穏やかならず、学校に行っても、びっくり仰天して慌てふためくことの連続でした。

必然、弦楽器のおけいこにはしわよせが来て、G線上をぎこちなく行き来する私の左手の四本の指先の動きは、いっそう鈍りがちになるのでした。とうとう、やめる決心をしたのでした。多少はいやいやながらだったかもしれませんが、それでも母の言いつけを守って、時には涙を流し左手の指先にはうっすらと血を滲ませたこともあり、何年間か私の左の肩口で、たとえノコギリをひくような音であっても、私に語りかけては話し相手になってくれていた可愛いバイオリンと、赤鉛筆の入った楽譜と、それを載せてきた譜面台を投げ出すのですから、たとえそれが勉強のためではあっても、多感な時期の私には清水の舞台から三度も飛び降りるほどの大事で、辛く悲しい決心でした。

怒った母の顔が目に見えるようです。寝床に入ってもそのことが頭から離れず、夢の中でバイオリンが現れては根性なしの私をののしるのか、私の左手の四本の指に語りかけては消え、そして、また現れては消えていくのです。レッスンに通っていた日々の出来事が次から次へと浮かんでは消え、

また浮かんでは消えていきます。うなされては止めどなく流れる涙で、枕を濡らす夜が何夜も何夜も続きました。風の強い雨の日に自分の体はずぶ濡れになりながらも、左手に持ったバイオリンのケースと楽譜の入ったカバンを濡らすまいと、吹き飛ばされそうになる傘を右手で必死にさしかけたこと、雪の積もった日に長靴を履いた私がすべって転んで、バイオリンを道路に放り投げてしまってすまない思いをしたこと、寒い日には指がかじかんで、とても演奏どころではなかったこと……。

母には勿論のこと、父にも、二人の姉にも、誰に相談することもなく、自分一人で密かに決心したのです。しかも、病床の母の言いつけを破って。それでも、やがてはそのことを母に告げなければならない時が来ました。ある日の放課後、私はいつものように病院の母に面会に行こうと、小銭を持ってバスに乗りました。今日こそは、バイオリンをやめること、いや、やめたことを母に告げて許しを乞わねばなりません。バスの中で揺れる私の頭の中には、怒った母の顔が浮かんで来ます。「母に会ったらどう言おうか？ああ言おう、こう言おう……」「どうして相談しなかったのか」と聞かれたら、どう言い訳しよう。「勉強に力を入れるためだと言おうか、どうしようか……その割には、余り勉強している訳ではないし……、嫌になったことにしようか……」「親が何だ、自分がやめると決めたものは決めたんだ」と言ったところで、所詮、強がりを言っているに過ぎません。少年の心は、揺れるバスそのままに右に左に揺れるのでした。浮かんで来るのは怒った母の顔ばかりで、言い訳の妙案は一向に浮かんで来ません。

およそ一時間ほど走ってバスは本通小学校前を通り過ぎ、病院からは少し遠い本通りの南の端にさしかかり、私はバスを降りて言い訳を考えながら、病院まで少し歩くことにしました。街の東の山手にある国立呉病院までの道のりは、ややなだらかな上り坂で、その道中を知恵を絞りながら、歩くことにしたのでした。

病院に着き、私は長くてうす暗い廊下を歩いて母の病室に行きました。ベッドの上の母は、いつものように私をほほえんで迎えてくれました。少年は、母に会えた嬉しさを照れ笑いで隠すように伏目がちにほほえみを返しました。母は、私が元気でいたか、御飯をちゃんと食べているか、しっかり勉強しているか、姉たちはどうしているか、みんな仲良くしているかといったようなありきたりで、しかも、とても大切なことを私に質問しました。病床の身にある母としては、ずうっと気に懸けていたのでしょう。はやる気持ちとは裏腹に、ことばが途切れがちのようです。バイオリンをやめたことを告げて、許しを乞おうと思って頭が一杯の私でしたから、返事がとりとめもありません。うん、うんと、目をそらしながらそこそこに返事をして、思いきって言い出すことにしました。「おかあちゃん、バイオリンをやめたよ、勉強が…」勉強が大変なのだと言おうとした私でしたが、声がつまって言葉になりません。上目遣いにちらりとベッドの上の母の顔を見遣ったきり、目を伏せて言葉が続けて出て来ないのです。

そこには怒った母の顔はなく、痩せて窪

んだ眼窩(オルビタ)の奥には優しさをたたえ、黙って少年を見つめる母の潤んだまなざしだけがありました。私は、涙があふれそうになる自分の顔を見せまいと母に顔向けできず、背を母の方に向けたまま必死で涙をこらえながら、ぼんやりと窓の外の色づき始めた木の葉に目を遣っていましたが、それでもこらえきれずに、「バイオリンをっ」と言って母の膝の上の掛け布団に顔を伏せました。母にすまないという気持ちと、中途で投げ出す自分の不甲斐なさと、いつもたおやかな音色で私に語りかけてくれていた、あの胴のくびれた可愛い四弦の楽器のいとおしさの入り混じった涙でした。母の窪んだ眼窩に涙が満ちて、痩せた頬を伝って白い布団の上に落ちて濡らしました。「自分が家を離れてこんな身でいるばっかりに、この子にまで……」

病床の母は叱ることはなく、「お前の気持ちは、よく分かっているのですよ」というように、窓から病床の布団の上に差し込む穏やかな秋の木漏れ日のような、その優しいまなざしを私に注いでいました。声もなく……、我が子に詫びるように。

# うちかたの先生

梅田病院
梅田　馨先生編

ああ、ついに来てしまった！「うちかたの先生」の原稿依頼です。不幸な星の下に生れた私なのです。「ヨイショせんでええぞ」という院長の声も、心なしか私にうったえるような響きがありました。

なにもこの時期に!! まもなくボーナスの考課だという時に!! 本当のことが書けないじゃないの、せっかくのチャンスなのに!! とかブツブツと言いながら、ペンをとった。私も、しょせんは自分が可愛いのでしょう。けっきょくは、おみこしヨイショ、ピンピンの文章になってしまいました。

さて！では、わが愛する院長のご紹介とまいりましょう。昭和十六年二月五日生れ、通称カオルちゃん。笑うと目尻が下がり、温和な印象を与えます。初めてお目にかかったのは、一年半前でした。やはり、温和

な感じで、笑顔の優しい方だと思いました。その頃は、毛髪の中に少しだけ白い物が混じっているだけでしたが、その数は次第に増え、現在は多数になっています。その年齢に達しているのも事実ですが、人の上に立つ身の苦労がわかるような気がします。

そんなうち方の院長先生は、様々な所で細かい点によく気が付かれ、側にいる私達の方が感心させられることが度々あります。それだけ、神経が繊細で敏感なのだろうと思われます。私も女性として生れてきていますので、そういう細やかな神経を持つ女性に憧れ、また一応目指していますので、是非、見習って磨いていきたいと思います。

また反面、非常に感情表現が豊かな方で、目と眉間にその様子が表れます。虫の居所が悪い時というか、御機嫌斜めの時は、目尻はそのままですが、眉間にしわが寄っています。それが癖なのかも知れませんが、すぐに私達には感じとれます。ちょっと近寄り難い時です。反対に、楽しいことがある時や上機嫌の時は、いつもの目尻が数倍に下がって、いつもの優しい笑顔が表れます。

どのような職場においても、勤務に対する姿勢はそれなりに厳しく、特に医療関係に従事する者ならば、それ以上です。その厳しい勤務を離れた時、ふと表れる院長先生の素顔に、時々、父親に対する感情のようなものを抱くことがあります。それは不思議な、とってもあたたかなものです。

がんばって お父さん!! Ns 一同

ここに書いてきたことが、私から見た院長先生の姿です。いつも、お世話になって苦労をかけることが多いですので、頭の白い物は減らないかも知れませんが、健康には十分気をつけて、あの優しい笑顔を絶やさない先生でいてほしいと思います。

〝ガンバッテ　お父さん!!〟

## あとがき

今月号は、先月入会された米今先生の作品でプロフィルにちょっと書いてありました〝バイオリン〟を載せさせていただきました。

〝うち方の先生〟も、そろそろ、あとが少なくなり、今月はどなたにもお願いしてなかったので、急遽わたくしが登場いたしました。読んでみて感じたことは、ホンネが出ていない、ヨイショ!!の文章であること。今までの〝うち方の先生〟をみていて光にはなんと優しい先生ばかり居られるのだろうと思っておりましたが、これでやっとわかりました。ホンネが出ておりません。やはり、サラリー、ボーナスの影響がコワイのでしょうね!?


| | |
|---|---|
| 発行所 | 光市医師会<br>TEL 0833 72−2234 |
| 発行者 | 竹中昭二 |
| 編集者 | 会報編集委員会 |
| 印刷所 | 光市御崎町<br>中村印刷株式会社 |